

# Quotations of Thought in Direct Speech

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3971">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3971</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 直接話法における考えの引用

河野 武

### 0. 序論

英語の直接話法には、大きく分けて発話の引用と考えの引用がある。また、直接話法に対応して、間接話法ないしは間接的表示形式があり、これによって発話や考えは報告される (Halliday 1985; Quirk et al. 1985)。次の例を対比されたい。

- (1) a. 'Perhaps she doesn't understand me,' he said.  
b. He said that perhaps she didn't understand him.
- (2) a. 'Perhaps she doesn't understand me,' he thought.  
b. He thought that perhaps she didn't understand him.

基本的に、直接話法は元発話・考えの忠実な再現であり、間接話法（間接的表示）は話し手による元発話・考えの解釈的表示である (Leech 1980; Carl & Gerrig 1990; Wilson 2000)。発話は形と意味を備えているので、直接話法にも間接話法にも適しているといえる。しかし、考えは意味（ないしは認知内容）から成っているが、発話のような明確な形を備えていないので、本来 (2b) のような解釈的表示に向いているといえる。(2a) のような考えの引用は、いわば考えを発話化したものと考えうる。

本論では、考えの引用の諸特性について、考えの報告や発話の引用・報告と対比しながら考察して行く。

### 1. 伝達節の動詞：意識動詞

発話の引用・報告に関わる伝達動詞は実に多種多様である。この種の動詞には、一般的発語動詞 say, 発話様態を表す動詞 (shout, whisper, mutter 等), 発語内動詞 (warn, order, suggest 等), 発話の談話ユニット内での位置づけを表す動詞 (begin, go on, interrupt 等), 発話行為に随伴する行為

を表す動詞 (sigh, smile, gasp 等) が含まれる (内田 1979; Banfield 1982; Leech 1980, 1983; Halliday 1985; Quirk et al. 1985; 河野 2006)。一方、考えの引用・報告に関わる意識動詞には次のようなものが存在する<sup>1</sup>。

- (3) '[A]nd what is the use of a book,' *thought* Alice, 'without pictures or conversation?' (*Alice*, p. 1)
- (4) She was off like a bird, bullet, or arrow, impelled by what desire, shot by whom, at what directed, who could say? What, what, Mrs Ramsay *pondered*, watching her. (*Lighthouse*, p. 63)
- (5) They must be out of bed by this time, she *supposed*, looking at the house, but nothing appeared there. (*Lighthouse*, p. 217)
- (6) Was it, she *wondered*, that the line of the wall wanted breaking, was it that the mass of the trees was too heavy? (*Lighthouse*, p. 219)
- (7) Teaching and preaching is beyond human power, Lily *suspected*. (*Lighthouse*, p. 63)
- (8) And seeing the gold watch lying in his hand, Mrs Ramsay *felt*, How extraordinarily lucky Minta is! (*Lighthouse*, p. 134)
- (9) Meanwhile, he *noticed*, Cam dabbled her finger in the water, and stared at the shore and said nothing. (*Lighthouse*, p. 192)
- (10) He sat, she *remembered*, working in a blaze of sun. (*Lighthouse*, p. 181)
- (11) [F]or this little ceremony of choosing jewels, which was gone through every night, was what Rose liked best, she *knew*. (*Lighthouse*, p. 93)

(なお、上の例では、(3)を除いて引用符が省かれているが、(5), (7), (8), (10)は直接話法であり、(6), (9), (11)は自由間接話法である。自由間接話法では、間接話法と同様に、被伝達節の時制やダイクシスは伝達節による制限を受ける。)このように、伝達節の動詞は、様々な認知状態や認知行為を表す。このうち、考えの引用にもっとも一般的な動詞は think である。これは発話の引用における say に比肩するものである。Think は、あらゆる認知状態・認知行為を未指定のまま、ないしは総称的に記述する役割をもつ。実際のデータでも、使用頻度の高いのは think とせいぜい wonder 程度であり、心理描写が

際立つディスコースででもない限り他の意識動詞が多彩に使い分けられることは一般的ではないと見てよい。

## 2. 引用と報告の乖離

既に述べたように、引用は元発話・考えの再現であり、報告は元発話・考えの現話者による解釈的表示である。従って、引用では元発話・考えのもつ感觸ないしは生々しさ・迫真性が伝えられるし、他方報告では元発話・考えは現話者の偏向がかかったかなり自由な解釈が提示される (Leech 1980; Clarl & Gerrig 1990; Wilson 2000)。伝達節の動詞の多くは引用と報告の両方に関わる。先の(1), (2)で見た say や think はその典型例である。この種の伝達・意識動詞では、一見、直接話法による引用は間接話法(間接的表示)に機械的に転換可能に思われるかもしれないが、実はそうではない。次の例を観察したい。

- (12) a. 'Does she really understand me?' he said.  
 b. He \*said/asked whether she really understood him.
- (13) a. 'Does she really understand me?' he thought.  
 b. He \*thought/wondered whether she really understood him.

例から明らかなように、say や think のような一般的伝達・意識動詞は直接話法では被伝達節との共起制限を受けないが、間接話法では制限を受ける。(ここで、一般的伝達・意識動詞以外の動詞、例えば warn, order, suggest 等の発語内動詞では間接話法のみならず直接話法にも同様の共起制限が介在することに注意しておきたい (内田 1979; Huddleston & Pullum 2002)。) 引用は、対象となる発話・考えが生起したことを記述するだけで十分だが、報告は発話・考えそのものと共にそれと関わる発話行為や認知行為を指定しなければならない。ここでの発話行為・認知行為の認定は話者の解釈的表示の一部であることは言うまでもない。

追跡可能な源泉をもつ「発話」の場合には、引用と報告の別個の様態があることは理にかなっていると思われるが、本来他者の外的観察を拒む「考え」の場合には、一見、引用は不可能ないしは困難な表現手段のように思われるであろう。しかし、内省してみれば分かるように、「考え」は何らかの形を与

えられなければ「考え」とは認定できないわけであり、さし当たっての確かな具現化は「発話」による他はないであろう。このようにして、心に浮かんだ考えは発話に託して記述されることになる。考えが直接的に引用されるのは、本来の発話の引用と同様に、生起した考えの感触・生々しさ・迫真性を伝えるためである。これは、一定の距離を置いた記述を特徴とする報告では果たしえない伝達効果である。

さて、考えの引用に関して二つの注目すべき事象がある。その一つは、発話の引用とも共通するが、伝達節は否定辞を伴えないことである。次の例を参照。

- (14) a. \*‘Perhaps she doesn’t understand me,’ he didn’t say.  
 b. \*‘Perhaps she doesn’t understand me,’ he didn’t think.

直接話法においては、本来は（現実ないしは仮想の）発話場面に生起した発話・考えを再現することがその役割であるから、源泉のない発話・考えは当然ながら再現できない。但し、対象となる発話・考えがすでに了解されており、再度言及される場合には、次のように容認可能となる（Banfield (1982: 191) を参照）。

- (15) a. He didn’t say: ‘Perhaps she doesn’t understand me.’  
 b. He didn’t think: ‘Perhaps she doesn’t understand me.’

第二に注目されるのは、伝達節に叙実動詞を伴う考えの引用の際に、叙実性が棚上げされる事実である。次の例を観察したい。

- (16) a. He sat, she *remembered*, working in a blaze of sun.  
 b. She *remembered* that he sat working in a blaze of sun.  
 (17) a. This little ceremony of choosing jewels was what Rose liked best, she *knew*.  
 b. She *knew* that this little ceremony of choosing jewels was what Rose liked best.

(16b)と(17b)においては、叙実動詞の性質によって、補文の表す命題は真であることが前提とされる<sup>2</sup>。これとは対照的に、直接話法の(16a)と(17a)においては、叙実動詞は引用対象となる考えの表す命題が真であることを特に前提にしない。この現象を説明すべく、Banfield (1982: 194-195) は、叙実動詞の補文の真偽性は話者によって主張されるのであり、直接話法における伝達節は話者が不在であるためとしている。しかし、この説明は奇妙に思われる。間接話法における報告者として話者が存在するのと平行して、直接話法には引用者としての話者が存在するとみなすべきであろう。問題は話者の不在ではなく、叙実性自体の性質にある。間接話法においては、補文の内容は現発話者による解釈的表示を表すものであるから、叙実動詞の補文の叙実性は現発話者によって既に確立されたものとして扱われる。これが本来の叙実性である。しかし、直接話法においては、引用文の表す発話・考えは元発話者に帰せられるものであり、現発話者の解釈は介在しない。従って、引用文に対する現発話者の叙実性の主張は棚上げにされるほかない。

上の議論に基づき、直接話法においては現発話者による叙実性の主張は棚上げにされるものとする、ではなぜあえて叙実動詞を用いるのかである。既に、(3)～(11)で見たように、一般的に、考えの直接引用に関わる意識動詞は、問題の考えと関連した元発話者(元経験者)の認知行為・認知状態を記述する機能をもつ。例えば、(6)のwonderは問題の考えが真偽判断を行うべき対象として〈懷疑〉行為(WONDERING)の中で経験されていることを表す。また、(7)のsuspectは問題の考えが証拠には欠けるが真であると判断されることの認識を表す。更に、(9)のnoticeは問題の考えが意識の対象になったことを表す。さて、以上の意識動詞の役割を踏まえた上で、叙実動詞はどのように特徴づけられるのであろうか。叙実動詞は、叙実動詞である以上、何らかの叙実性に関与しては不合理であろう。現発話者と関連した叙実性は既に退けられているので、残る可能性は元発話者と関連した叙実性である。確かに、(16a)のrememberや(17a)のknowは、問題の考えが元発話者(元経験者)によって真と想定されている命題を表しているともみなしうる。Knowはそのような叙実性の記述であり、rememberは問題の考えが〈想起〉行為(REMEMBERING)の中で経験されていることを表す。

### 3. 文頭伝達節の機能

既に(1)・(2)で見たように、直接話法は発話の引用、考えの引用のいずれも伝達節が文末に現れる形と、文頭に現れる形を許す（なお、ここでは、文中の伝達節は文末の伝達節の文体的変種として扱う）。このうち、文末伝達節が無標であり、文頭伝達節は有標である。その証拠として、引用に關与する伝達・意識動詞は、文末伝達節には生起できるが文頭には生起できないものが存在する事実が挙げられる（Banfield 1982; 河野 2006）。なお、逆のケース、すなわち、文頭伝達節には生起できるが文末には生起できない伝達・意識動詞は存在しない。具体例を見てみたい。（なお、(21a)・(22a)・(23a)は自由間接話法であるが、目下の問題の検証のためには直接話法と同等に扱っておくことにする。）

- (18) a. 'What a pity it wouldn't stay!' the Lory *sighed*.  
 b. \*The Lory *sighed*, 'What a pity it wouldn't stay!'
- (19) a. 'All yours' Hagrid *smiled*.  
 b. \*Hagrid *smiled*, 'All yours.'
- (20) a. 'I'm a *what*?' Harry *gasp*ed.  
 b. \*Harry *gasp*ed, 'I'm a *what*?'
- (21) a. Lords, Ascot, Hurkingham, what was it? she *wondered*.  
 b. \*She *wondered*: 'Lords, Ascot, Hurkingham, what is it?' (Banfield 1982: 45)
- (22) a. He was getting fat, she *noticed*.  
 b. \*She *noticed*: 'He is getting fat.' (Banfield 1982: 45)
- (23) a. Ah dear, she *remembered* — it was Wednesday in Brook Street.  
 b. \*She *remembered*: 'Ah dear, it is Wednesday in Brook Street.' (Banfield 1982: 45)

上の(18)～(20)は発話の引用の例であり、(21)～(23)は考えの引用の例である。発話の引用に關わる伝達動詞のうち、*sigh*, *smile*, *gasp*等は発話行為そのものを記述せず、発話行為に随伴する行為を表すが、この種の動詞は文末伝達節のみにしか生起できない。考えの引用に關わる意識動詞は、一般的意識動詞の *think* を除いては文頭伝達節には現れえない。次に、文末、文頭位

置における think の実例をいくつか挙げておきたい。

- (24) It didn't matter, any of it, she *thought*. A great man, a great book, fame — who could tell? (*Lighthouse*, p.136)
- (25) Looking at his hand he thought that if he had been alone dinner would have been almost over now; he would have been free to work. Yes, he *thought*, it is a terrible waste of time. (*Lighthouse*, p.102)
- (26) '[S]it down, both of you, and don't speak a word till I've finished.' So they sat down, and nobody spoke for some minutes. Alice *thought* to herself, 'I don't see how he can finish, if he doesn't begin.' (*Alice*, p. 95)
- (27) Cam looked down into the foam, into the sea with all its treasure in it, and its speed hypnotized her, and the tie between her and James sagged a little. It slackened a little. She began to *think*, How fast it goes. Where are we going? (*Lighthouse*, p.188)
- (28) When she read just now to James, 'and there were numbers of soldiers with kettle-drums and trumpets', and his eyes darkened, she *thought*, why should they grow up, and lose all that? (*Lighthouse*, p.68)
- (29) Then when she turned to William Bankes, smiling, it was as if the ship had turned and the sun had struck its sails again, and Lily *thought* with some amusement because she was relieved, Why does she pity him? (*Lighthouse*, p.97)
- (30) For Charles Tanskey . . . had been saying that people don't read Scott any more. Then her husband *thought*, 'That's what they'll say of me'; so he went and got one of those books. (*Lighthouse*, p.135)

(24)と(25)は文末伝達節の例であり、残りは文頭伝達節の例である。(25)においては、最初の文が記述する主人公の心的世界を継承する形で引用発話が現れている。(24)も同様の文脈での引用であるが、両文とも引用部分を先行させ、先行文と隣接するようにデザインしたうえで、伝達節を補足的に付加



している。しかし、文末伝達節には特別な機能は認め難い。

これとは対比的に、文頭伝達節には触知可能な機能が存在する。(26)・(27)の引用発話は、(28)～(30)とは異なり、統語的に独立しており、したがって統語的には伝達節は文末・文頭のいずれに位置しても問題はない。しかし、語用論的には、文頭位置の方がより適切であると感じられる。一般的に、人が何かの考えを抱いたり発話行為を行ったりすることは人間の活動としてありふれたものであり、当然視される。しかしながら、考えの引用は、より基本的な、発話の引用と競合するのが常であるので、そのいずれの引用であるかを早めに告知するのは、関連性理論という手続きの意味に貢献し、発話理解に役立つ (Sperber & Wilson 1986; Wilson & Sperber 1993)。(26)・(27)においては、それぞれの主人公が thinking (to oneself) を行ったか saying (to oneself) を行ったかは文脈的に予測できない。直接引用では、発話の引用が主であり、考えの引用は二次的であるから、文脈的にどちらかが優勢でない限り、伝達節で明示されなければ、当該の引用は発話の引用として受け止められるであろう。したがって、考えの引用の場合には、有標であるがゆえに、引用部分の提示に先立って考えの引用であることを明示する方が発話が理解しやすい。

(28)～(30)も文頭伝達節の例であるが、ここでの引用発話は統語的制約を受けている。(28)の引用発話は副詞節を伴う主節として、(29)は等位節として、さらに(30)は先行発話との時間的順序を表す副詞を伴う文として表出されている。このような統語的環境の中では、文末伝達節は排除される。しかし、結果的には、(26)・(27)の場合と同様に、文頭伝達節のおかげで当該の引用が考えの引用であることが早期に伝えられる。

このように、直接話法においては、文頭伝達節は発話の引用と対比的に考えの引用を導入する機能をもっていると考えられる。既に、河野 (2006: 8) で発話の引用に関わる文頭伝達節の導入機能を <What S (the original speaker) said is this> のように定式化した<sup>3</sup>が、これと並行的に、考えの引用に関わる導入機能を次のように定式化しておきたい<sup>3</sup>。

- (31) 直接話法における文頭伝達節の導入機能 (考えの引用の場合):  
 <What E (the original experiencer) thought is this>

## 4. 考えの引用と発話の引用の双方向的移行

考えの引用と発話の引用は伝達節の動詞によって表し分けられるが、これらの動詞がある種の語句を伴うことによって、本来の考えの引用から発話の引用に移行したり、逆に本来の発話の引用から考えの引用に移行したりする現象が見られる。次の例を観察したい。

- (32) a. 'What fun!' *said* the Gryphon, *half to itself, half to Alice*. (*Alice*, p. 95)  
 b. 'Now, I'll manage better this time,' she *said to herself*, and began by taking the little golden key, and unlocking the door that led into the garden. (*Alice*, p. 76)
- (33) a. 'Did I really say "bugger"?' she *asked herself*, in an awed whisper. (British National Corpus)  
 b. Would the water last? Would the provisions last? she *asked herself*, telling herself a story but knowing at the same time what was the truth. (*Lighthouse*, p. 233)
- (34) 'I will begin again,' John *thought aloud*.
- (35) 'Can we buy all this in London?' Harry *wondered aloud*. (*Potter*, p. 77)

(32)・(33)が示すように、発話行為を表す動詞の *say* や *ask* 等は、再帰代名詞を含む方向を表す前置詞句を伴うことによって、(32a)・(33a)のようにモノローグになったり、(32b)・(33b)のように内的モノローグになったりする。内的モノローグは考えの亜種に他ならない。これとは対照的に、(34)・(35)においては、本来認知行為を表す *think* や *wonder* が、声に出して表出することを表す副詞の *aloud* を伴うことによって発話行為の表示に変容している<sup>4</sup>。

さらに、発話行為を表す動詞の *say* や *ask* は、意識動詞に埋め込まれたり、法助動詞や未来時を表す助動詞を伴うと、発話の引用から考えの引用へ移行する事実がある。

- (36) 'What does it mean? How do you explain it all?' she *wanted to say*, turning to Mr Carmichael again. (*Lighthouse*, p. 203)
- (37) 'D'you remember?' she *felt inclined to ask* him as she passed him,

- thinking again of Mrs Ramsay on the beach . . . (*Lighthouse*, p. 194)
- (38) Poor William Bankers, she *seemed to be saying*, as if her own weariness had been partly pitying people, and the life in her, her resolve to live again, had been stirred by pity. (*Lighthouse*, p. 97)
- (39) One might say, even of this scrawl, not of that actual picture, perhaps, but of what it attempted, that it ‘remained for ever’, she *was going to say*, or for the words spoken sounded even to herself, too boastful, to hint, wordlessly . . . (*Lighthouse*, p. 204)
- (40) She *had it on the tip of her tongue to say*, as they strolled, ‘It’ll cost fifty pounds’, but instead, for her heart failed her about money, she talked about Jasper shooting birds . . . (*Lighthouse*, pp. 76-77)
- (41) In a moment he *would ask* her. ‘Are we going to the Lighthouse?’ And she *would have to say*, ‘No: not tomorrow; your father says not.’ (*Lighthouse*, p. 72)

上の例の引用発話は、実際には具現化された発話ではなく、心的表示された発話である。(36)～(38)の発話動詞は認知行為・認知状態を表す上位動詞 *wanted*, *felt inclined*, *seemed* の補文に現れている。また、(39)では、未来の予定・意図を表す助動詞を伴うことによって、発話が未然のものであることが記述されている。(40)の *had it on the tip of her tongue* も(39)に現れた助動詞と同等の役割を果たす。(41)では、発話動詞が推量の法助動詞 *would* を伴う例が連続して使用されている(後の例ではさらに義務の法助動詞 *have to* を伴う)が、共に近接して起こるかもしれない発話を心的に表示しているものと解釈できる。

## 5. 結論

本論では、考えの引用の諸特性について、考えの報告や発話の引用・報告と対比しながら考察した。特に、考えの引用に関与する動詞類、考えの引用と報告との非対応、文頭伝達節に固有の導入機能、考えの引用と発話の引用の流動性について議論した。本論考を通して、考えの引用と発話の引用の個別性と普遍性の一端が明らかになったと信ずる。

## 注

- 1 以下、データの出典はそれぞれ括弧内のように略記する。  
Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* (Alice)  
Woolf, *To the Lighthouse* (Lighthouse)  
Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (Potter)
- 2 直接話法による考えの引用に関わる叙実動詞は、Karttunen 1971 の区別に従えば、真の叙実的述語 (regret, resent, forget, amuse 等) ではなく、半叙実的述語 (know, remember, notice, realize 等) に限定されるように思われる。半叙実的述語は補文の前提が否定や疑問の影響を受けない読みと受ける読みとがあることが知られており、直接話法の場合を含めて、環境による影響を受けやすいと言える。
- 3 発話の引用については、文頭伝達節は導入機能を持つと同時に、伝達動詞は先行文脈から喚起された情報か推論可能な情報かのいずれかを表す必要があった (河野 2006; Prince 1978, 1981; 河野 1998)。考えの引用の場合にも同一の情報制約が関るとしてよいと思われる。ただ、この場合、文頭伝達節に現れる動詞は極めて限定されており、筆者の観察した限りでは、使用頻度の高い think の他にはわずかに feel (例文 (8) を参照) が認められるに過ぎないので、情報制約の介在はあまり目立たないであろう。
- 4 例文が示すように、think aloud 及び wonder aloud は、共に考えの引用に用いられるが、奇妙なことに、間接話法による考えの報告には wonder aloud のみが許容される。  
(34') \*John thought aloud that he would begin again.  
(35') Harry wondered aloud if they could buy all that in London.

## 参考文献

- Banfield, A. 1982. *Unspeakable sentences: narration and representation in the language of fiction*. Boston: Routledge.
- Carroll, L. 1865/1975. *Alice's adventures in Wonderland*. 東京: 北星堂書店。
- Clark, H. and R. Gerrig. 1990. Quotations as demonstrations. *Language* 66: 764-805.
- Halliday, M.A.K. 1985. *An introduction to functional grammar*. London: Edward Arnold.
- Huddleston, R. and G.K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Karttunen, L. 1971. Some observations of factivity. *Papers in linguistics* 4, 55-69.
- 河野 武 1998. 「各種分裂文の関連性特性」, 『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』, 289-306.

- 河野 武 2006. 「話法の語用論的制約」, 『大妻女子大学紀要 (文系)』第 38 号, 1-12.
- Leech, G.N. 1980. *Explorations in semantics and pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins B.V.
- Leech, G.N. 1983. *The principles of pragmatics*. London: Longman.
- Prince, E.F. 1978. A comparison of *wh*-clefts and *it*-clefts in discourse. *Language* 54, 883-906.
- Prince, E.F. 1981. Toward a taxonomy of given-new information. In Cole, P. (ed.) *Radical pragmatics*. New York: Academic Press, 223-255.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Rowling, J.K. 1997. *Harry Potter and the philosopher's stone*. London: Bloomsbury Publishing Plc.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell.
- 内田聖二 1979. 「直接話法と伝達動詞」, 『語法研究と英語教育』第 1 号。東京: 山口書店, 22-34.
- Wilson, D. 2000. Metarepresentation and linguistic communication. In Sperber, D. (ed.) *Metarepresentations: a multidisciplinary perspective*. Oxford: Oxford University Press, 411-448.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. Linguistic form and relevance. *Lingua* 90, 1-25.
- Woolf, V. 1927/1964. *To the lighthouse*. London: Penguin Books.